Aristophanes, *Pax* 1268-1304

—叙事詩およびエレゲイア詩のパロディーについて

佐野好則

I

アリストパネース『平和』には、ラーマコスの息子とクレオーニューモスの息子が登場し、それぞれ叙事詩とエレゲイア詩を歌うパロディー場面(1268-1304)がある。ラーマコスの息子が歌う最初の部分はEpic Cycleの『エピゴノイ』の冒頭であり、クレオーニューモスの息子が歌うのはアルキロコス断片5 (West)である。これら二人の子供が歌う叙事詩とエレゲイア詩は、『エピゴノイ』とアルキロコスの断片を校訂する際の重要な資料である。

一般に喜劇において他の作品が引用される場合、しばしば変更が加えられる。『エピゴノイ』とアルキロコスの断片を校訂する場合にも、アリストパネースによって加えられた変更を見極める必要がある。実際、『エピゴノイ』とアルキロコス断片校訂者の間には、アリストパネースによって加えられた変更の範囲に関して見解の相違がある。この変更の範囲を見極めるためには、他の作家や『平和』の古註記者によって引用された『エピゴノイ』やアルキロコス断片5の詩句との比較とともに、『平和』の文脈の中で、いかなる効果を持つものとしてそれらの叙事詩やエレゲイア詩が引用されているのかを検討する必要がある。

本稿において、一方では『エピゴノイ』およびアルキロコス断片5の引用と『平和』の文脈との関連性を考慮に入れ、これらの引用によって得られる喜劇的效果を検討する。他方、そのことによって、アリストパネースがそれぞれの作品を引用する際に加えた変更の範囲を検討し、『エピゴノイ』とアルキロコスの断片校訂に関する議論に寄与することを目的とする。

II

トリュガイオスはラーマコスの息子⁽¹⁾が登場する際に、「これから歌うものの、歌い始めの予行をするために (ἵνα ἄττ' ἄσεται προαναβάλῃται)」外に出てきたようだと述べ(1266-7行)、その子供に対して「まず歌い始めをやってみなさい (πρότερον ἀναβαλοῦ)」と言う(1269行)。それに続いてラーマコスの息子はダクテュロスの韻律で歌い出す。

Π. Α. νῦν αὐθ' ὀπλοτέρων ἀνδρῶν ἀρχώμεθα ——

Τρ. παῦσαι

ὀπλοτέρους ἄδων . . . (1270-1)

ラ.の息子 さあ今度は若武者たちから歌い始めよう——

トリュ. やめてくれ、

若武者たちを歌うのは。

(1) この少年が誰の息子であるかは1290行で判明する。

1270 行についての古註はこれを『エピゴノイ』の冒頭であるとし⁽²⁾、また『ホメロスとヘーシオドスの歌くらべ』(以下 *Certamen*)でも『エピゴノイ』の冒頭として第五脚まで同一の詩句が引用されている。

Ἐπιγόνους . . . ἦς ἡ ἀρχή·

νῦν αὐθ' ὀπλοτέρων ἀνδρῶν ἀρχώμεθα Μοῦσαι.

(*Certamen* 258-9 Allen = *Epigoni* fr. 1 Davies *EGF*)

従って 1270 行は『エピゴノイ』の冒頭から取られたものであることは確実であろう。1270 行末のトリュガイオスの科白となっている παῦσαι という語は、もとの『エピゴノイ』の行末の Μοῦσαι との発音の類似を意識して選ばれたものとみなしうる。

しかし、その後ラーマコスの息子が歌う詩行(1273-4, 1276, 1282-3, 1286-7)に関して、それらも『エピゴノイ』の断片である可能性について研究者たちの間に見解の相違がある。Allen は 1282-3 行と 1286-7 行について、『エピゴノイ』の断片である可能性を示唆している⁽³⁾。Bernabé は Allen の見解に沿って 1282-3 行を『エピゴノイ』Fragm. Dub. 6 とし、1286(末尾除く)-1287 行を『エピゴノイ』Fragm. Dub. 7 とする⁽⁴⁾。それに対して Davies は Allen の見解を受け入れず、1270 行以外のラーマコスの息子が歌う詩行を『エピゴノイ』の Fragn. Dub. とはしない⁽⁵⁾。West も同様である⁽⁶⁾。

『エピゴノイ』校訂者たちの間の以上の相違を踏まえた上で、ラーマコスの息子とトリュガイオスのやりとりを検討したい。1270 行の『エピゴノイ』からの引用の中の ὀπλοτέρων (より若い者たち) という言葉に反応して、トリュガイオスは παῦσαι ὀπλοτέρους ἄδων (「ὀπλοτέρους を歌うのはやめろ」と述べている。これは「より若い」を意味する ὀπλότερος という形容詞を ὄπλα (武器) と結びつけた曲解に基づいている⁽⁷⁾。ὄπλα という語はこの前の武器商人たちとのやりとりでも用いられている。

..... καὶ γὰρ οὐτοσί

ὄπλων κάπηλος ἀχθόμενος προσέρχεται.

(1208-9)

というのもそこに

武器商人たちが不機嫌な様子でやって来るから。

ὀπλότερος の曲解をしてトリュガイオスが述べる παῦσαι ὀπλοτέρους ἄδων という発言は、先行する場面でトリュガイオスと ὄπλων κάπηλος とのやりとりがあり、おそらく実際に小道具としていくつかの武具が持ち出されたこととの関連性を作り出す

(2) Schol. VG ad 1270: ἀρχὴ τῶν Ἐπιγόνων Ἀντιμάχου.

(3) Allen, p. 116: “fortasse ex Epigonis sumpsit Aristophanes et quos post fr. I citat versus: . . . (*Pax* 1282-3, 1286-7 の引用) . . . de quibus tacet quidem scholiasta, sed idem Certaminis auctor ita 1282, 1283 adhibet (107, 108) ut 1282 Hesiodo adscribat, lecto tamen δειπνον ἐπειθ' εἶλοντο in initio.”

(4) Bernabé, p. 31.

(5) Davies, pp. 26-7.

(6) West, *Greek Epic Fragments*, pp. 54-9.

(7) ὀπλότερος は語源的には ὄπλα と結びついており、「武具を持つによりふさわしい」の意味であったことが推測されるが、実際の用例においては νεώτερος と同じ意味で用いられている。Cf. LSJ, s. v. ‘ὀπλότερος’; Olson, ad *Pax* 1270-3.

ものと思われる。

さらにラーマコスの息子は叙事詩の朗唱を続ける。

Π. Α. οἱ δ' ὅτε δὴ σχεδὸν ἦσαν ἐπ' ἀλλήλοισιν ἰόντες,
σὺν ῥ' ἔβαλον ῥινοὺς τε καὶ ἀσπίδας ὀμφαλοέσσας.

Τρ. ἀσπίδας; οὐ παύσει μεμνημένος ἀσπίδος ἡμῖν;

Π. Α. ἔνθα δ' ἄμ' οἰμωγὴ τε καὶ εὐχολὴ πέλεν ἀνδρῶν. (1273-6)

ラ.の息子 さてお互いの方へと向かって進み、間近になったとき、
彼らは革盾と鋌のついた盾を撃ち合わせた。

トリュ. 盾だと。盾のことを俺たちに言うのはやめてくれ。

ラ.の息子 そこで一斉に男たちのうめき声と勝ち誇った叫びが生じた。

1273-4 行および 1276 行については Allen も Bernabé も『エピゴノイ』からの引用である可能性を示唆していないが、Olson は以下のようにその可能性に言及する。

It is not impossible that these lines (ignored by Bernabé) are part of (or at least adapted from) the proem to the *Epigoni*, and the rel. clause would be a typical feature (cf. *H. Il.* 1.2-5; *Od.* 1.1-2; *h.Ap.* 2; *h.Ven.* 2-5). As ῥινοὺς τε καὶ ἀσπίδας is a glaring tautology, however, this is more likely a free Aristophanic composition, roughly based on Homeric models such as *Il.* 4.446-51=8.60-5.⁽⁸⁾

この引用の前半で Olson は、1273-4 行が『エピゴノイ』の序歌の一部またはその翻案である可能性を論じている。しかし、これらの詩行は戦闘場面の描写に属するものであり、内容的に序歌に属するとは考え難い。また Olson は 1273 行の関係節について、叙事詩の序歌にしばしば関係節が用いられることと合致するとみなしている。しかし、1273 行では関係代名詞 *οἱ* に接続詞 *δέ* と時の接続詞 *ὅτε* が続いており、先行詞が属する文からの時の経過を含意している。このような関係節は叙事詩の序歌に特徴的なものではない。従って、1273-4 行および 1276 行は『エピゴノイ』の序歌から採られたものではありえないと考えてよい。

それに対して、これらの詩行は、上の Olson の引用の後半で述べられているように、ホメーロス叙事詩の詩句をもとにしてアリストパネースが構成したものであることの蓋然性は高いと思われる。Olson の引用の最後にある『イーリアス』第四巻と第八巻の箇所は以下の通りである。

οἱ δ' ὅτε δὴ ῥ' ἐς χῶρον ἓνα ξυιόντες ἴκοντο,
σὺν ῥ' ἔβαλον ῥινοὺς, σὺν δ' ἔγχεα καὶ μένε' ἀνδρῶν
χαλκεοθωρήκων· ἀτὰρ ἀσπίδες ὀμφαλόεσσαι
ἔπληντ' ἀλλήλησι, πολὺς δ' ὀρυμαγδὸς ὀρώρει.
ἐνθα δ' ἄμ' οἰμωγὴ τε καὶ εὐχολὴ πέλεν ἀνδρῶν

ὀλλύντων τε καὶ ὀλλυμένων, ῥέε δ' αἵματι γαῖα. (Δ446-51 = Θ60-5)

Δ446 行は 1273 行と類似しており、Δ447-8 行の下線部を *τε καί* を用いて合わせると 1274 行になる。また Δ450 行は 1276 行と同一である。さらに 1273 行と同一の詩行は『イーリアス』に十二回見出される⁽⁹⁾。1273 行と 1276 行が『イーリアス』

(8) Olson, ad *Pax* 1273-6.

(9) Γ15, Ε14, 630, 850, Ζ121, Α232, Ν604, Π462, Υ176, Φ148, Χ248, Ψ816.

の詩行をそのまま用いた可能性が高いのに対して、1274行はアリストパネースが手本を組み合わせて作った行である可能性が高い。この行については Olson が上の引用の中で 'glaring tautology' と呼んでいるように、「盾」を意味する二つの語が並べられていること (ῥινοὺς τε καὶ ἀσπίδας) が目立つ。この行に続く 1275 行のトリュガイオスの科白の中で ἀσπίς が二度用いられていることにより、盾はさらに強調される。この行での μεμνημένος ἀσπίδος ἡμῶν (盾を我々に思い出させる) において、ἀσπίς という語は軍務を全般的に表しているとみなすことができる。336 行の ἐκφυγῶν τὴν ἀσπίδα においてもこの語は軍務を全般的に表している⁽¹⁰⁾。それと同時にここでの執拗なまでの盾の強調は、クレオーニュモスの息子が歌うソローンのエレグイア詩の中で ἀσπίς に焦点が当てられること (1298) への伏線となっていると考えられる。

ラーマコスの息子にどのようなことを歌えばよいのか尋ねられて (1279)、トリュガイオスは歌うべき題材として食事場面の詩句を例として示す。

ὥς οἱ μὲν δαίνυντο βοῶν κρέα' καὶ τὰ τοιαυτί·
'ἄριστον προτίθεντο καὶ ἄθ' ἥδιστα πάσασθαι.' (1280-1).

「そのように彼らは牛の肉を食べた」の類いだ、
「彼らは朝食を用意した、食べるに美味しいものを」とか。

それに応じてラーマコスの息子は以下の二行を歌う。

ὥς οἱ μὲν δαίνυντο βοῶν κρέα καὶ χένας ἵππων
ἐκλυον ἰδρώοντας, ἐπεὶ πολέμου ἐκόρεσθην. (1282-3)

そのように彼らは牛の肉を食べ、汗にぬれた馬の首を
解き放した、戦争に飽きた後で。

前述のように Allen はこれら二行が『エピゴノイ』から採られたものである可能性を指摘し、それに追隨して Bernabé はこの二行を『エピゴノイ』の Frag. Dub. としている。この二行とほぼ一致する二行が *Certamen* にある。

δείπνον ἔπειθ' εἴλοντο βοῶν κρέα καὶ χένας ἵππων
ἐκλυον ἰδρώοντας, ἐπεὶ πολέμοιο κορέσθην. (*Certamen* 107-8)

1270 行の場合には、*Certamen* の中で『エピゴノイ』からの引用であることが明示されており、『平和』の古註にもそのことが記されている。しかし、この二行については *Certamen* にも『平和』の古註にも『エピゴノイ』からの引用であるという記述はない。1282-3 行とほぼ一致する詩行が *Certamen* にあること自体は、この二行が 1270 行のように『エピゴノイ』から採られた可能性には結びつかないと思われる⁽¹¹⁾。従って、1282-3 行が『エピゴノイ』からの引用である可能性については、『平和』の文脈の中で判断されるべきであると思われる。

1270 行で『エピゴノイ』の冒頭を歌った後、ラーマコスの息子が 1273-4 行お

(10) Olson, ad *Pax* 335-6.

(11) *Certamen* 107-8 行は、意味が通じない詩行にもう一行付け足すことにより意味が通じるようになる詩行が集められている箇所、その一例として挙げられている。すなわち 107 行のみを取り上げると、ἀχένας ἵππων が βοῶν κρέα と並んで εἴλοντο の目的語として δείπνον の内容となる。『平和』1282 行においても、一行のみを取り上げたときの滑稽さが意図されていた可能性はないとは言いきれないかもしれない。

ディカイオポリスのやりとりの中にも見出される⁽¹³⁾。

ΛΑ. φέρε δεῦρο, παῖ, θώρακα πολεμιστήριον.

ΔΙ. ἔξαιρε, παῖ, θώρακα κάμοι τὸν χοᾶ.

ΛΑ. ἐν τῷδε πρὸς τοὺς πολεμίους θωρήξομαι.

ΔΙ. ἐν τῷδε πρὸς τοὺς συμπότας θωρήξομαι. (*Acharn.* 1132-5)

ラーマコスがθωρήξομαιを「私はθώραξを身につけよう」の意味で用いているが、ディカイオポリスは同じ動詞を「私は飲酒で (cf. χοᾶ 1133) 活力をつけよう」の意味で用いている。

『平和』の1286行でのθωρήσσωの用法については、武具商人場面(1210-1264行)との関連をも考慮に入れるべきであると思われる。武具商人場面ではλόφος(兜飾り)、θώραξ、σάλπιγξ(ラツパ)、κράνος(兜)、δόρυ(槍)がおそらく小道具として持ち出され、それらについての買い取りの交渉が行なわれる。θώραξについては、これを便器として買い取ることをトリュガイオスが申し出て、それを便器として使う格好をしてみせる(1224-1239行)。他の武具と比べて、θώραξにはより多くの詩行が割かれている。ラーマコスの息子とのやりとりでのθωρήσσωの意味の取り違いによって、前の場面でのθώραξをめぐるやりとりとの関連性が作り出されるということができらるであろう。

1287行と類似の詩行は『イーリアス』第十六巻267行(ἐκ νηῶν ἐχέοντο βοή δ' ἄσβεστος ὀρώρει.)にある⁽¹⁴⁾。行の後半と同一の詩句はそれ以外に『イーリアス』に四回見出される⁽¹⁵⁾。1286行はθωρήσσωの両義性を活用することを目的としてアリストパネースによって作られ、1287行は『イーリアス』の類似詩行を参考にして作られたものである可能性が高いと思われる。

ラーマコスの息子が歌う叙事詩の詩句のうち、『エピゴノイ』の冒頭であることが確かな1270行以外の詩行(1273-4, 1276, 1282-3, 1286-7)については、以上の考察により『エピゴノイ』の断片である可能性は考え難い。むしろ、アリストパネースは、ラーマコスの息子とトリュガイオスのやりとりと、先行する武具商人場面や続くクレオーニュモスの子供とのやりとりとの関連性を作り出すために適当な詩句を、主に『イーリアス』の詩句を手本として翻案したものと考えべきである。『エピゴノイ』断片校訂に関しては、1282-3行および1286-7行をFrag. Dub.として扱うことは適切ではないと思われる。

III

ラーマコスの息子とのやりとりの後で、クレオーニュモスの息子とのやりとりの場面(1295-1301)となる。この場面でクレオーニュモスの息子はエレゲイア詩の朗唱の練習をする。

Π. Κ. ἀσπίδι μὲν Σαίων τις ἀγάλλεται, ἦν παρὰ θάμνω,
ἔντος ἀμώμητον, κάλλιπον οὐκ ἐθέλων —

Τρ. εἰπέ μοι, ὦ πόσθων· εἰς τὸν σαυτοῦ πατέρ' ἄδεις;

(13) Olson, ad *Pax* 1286-7.

(14) *Ibid.*

(15) Λ500, 530, Ν169, 540.

Π. Κ. ψυχὴν δ' ἐξεσάωσα ——

Τρ. κατήσχυνας δὲ τοκῆας. (1298-1301)

ク.の息子 サイオイ族の誰かが、盾に得意がっている。それを茂みの近くに、非のうちどころなき武具を、私は気が進まぬながら残した——

トリュ. 言ってくれ、坊や、お前の父親について歌っているのか。

ク.の息子 だが命は救った——

トリュ. でもお前は親の面目を失わせた。

この箇所への古註は、このエレゲイア詩をアルキロコスのものとし、詩の続きを引用する。

καὶ τοῦτο Ἀρχιλόχου ἐστὶν ἐξῆς

ψυχὴν δ' ἐξεσάωσα. τί μοι μέλει ἀσπίς ἐκείνη;

ἐρρέτω.

(Schol. V ad *Pax* 1301)

このエレゲイア詩 fr. 5 (West) は複数の著作家たちによって引用されており、その一行目と二行目 (*Pax* 1298-9) については、アルキロコスの校訂者たちの間で、アリストパネースの伝承のままとすることで見解が一致しているが、三行目については見解が相違している。主な伝承における第三行目の前半は以下の表の通りである。

(1) ψυχὴν δ' ἐξεσάωσα Ar. *Pax* 1301.

(2) αὐτὸν μὲν μ' ἐσάωσα Olympiod. in Plat. *Gorg.* p. 128, 13 Norv.

(3) αὐτὸν μ' ἐξέσασσα Elias *proleg. philos.* 8 p. 22 Busse.

(4) αὐτὸς δ' ἐξέφυγον θανάτου τέλος Sext. Emp. *Pyrr. Hyp.* 3. 126.

アルキロコスの校訂者、注解者のうち Lasserre, Treu, Perrotta-Gentili は、(1) のアリストパネースの読みをそのまま採用している。また、Buchholz-Peppmüller, Tarditi は、(4) の Sextus Empiricus の読みをそのまま採用している。それに対して、Hoffmann は αὐτὸν δ' ἐξέσασσα という読みを提案した。これは (2) と (3) にある αὐτόν と (1) と (4) にある δέ を組み合わせたものである。δέ はアルキロコス断片一行目の μέν と対応する。また、αὐτόν のみで再帰代名詞となるのはホメーロス叙事詩にはあるが⁽¹⁶⁾、アッティカ方言の用法ではない。(2) と (3) のように με が添えられた読みは、アッティカ方言に適合させられたものであると理解できる。(4) にも行頭に αὐτός の変化形があったことが反映されている⁽¹⁷⁾。Hoffmann によって提案されたこの読みは Diehl, Husdon-Williams, Campbell, West, Adkins, Gerber によって採用されている。本論考の筆者もこの読みを支持する。

他方、アリストパネース『平和』1301行において αὐτόν が ψυχὴν に変更された理由について、Dover はアッティカ方言への適合 (“an accommodation to Attic usage”)⁽¹⁸⁾ としている。さらに West は Dover の見解に基づいて “Aristophanes’

(16) Schwyzer. *Gr. Gr.* II. p. 196. Cf. Dover, p. 11.

(17) West, *Studies*, p. 118: “Sextus is quoting from memory; he remembered αὐτο. δ' ἐξε- from the true text, but, influenced by what he had just written (σεμνυνόμενος ἐπὶ τῷ τὴν ἀσπίδα ῥίψας φυγεῖν), made it into αὐτὸς δ' ἐξέφυγον θανάτου τέλος, and then gave up.”

(18) Dover, p. 11.

- Χο. πάσχοι γε τοιαῦθ' οἶάπερ Κλεώνυμος. (444-6)
 トリュ. そして、もし誰かが戦闘司令官になることを欲して、あなたが
 光の中へ出て来るのを妬むなら、女神よ、そいつは戦闘の中で一
 コロス クレオーニュモスと同じようなことを蒙りますように。

ここで οἶάπερ Κλεώνυμος 「クレオーニュモスと同じようなこと」とは何であるか明示的に述べられていないが、盾（または武具）を捨てて逃げたことおよびその結果としての臆病の評判を指すことは明らかである⁽²²⁾。クレオーニュモスのこの行為あるいは臆病さは『平和』の中で後に 678 行と 1299-1301 行で言及されるのみでなく、アリストパネースの他の劇でもしばしば言及されている⁽²³⁾。『平和』の中ではクレオーニュモスに関して 446 行で軽く触れられた後、673-8 行で ψυχὴν γ' ἄριστος という痛烈な皮肉を含んだ表現と、ὑποβολιμαῖος をもじった ἀποβολιμαῖος τῶν ὀπλων という表現で臆病さと武具を投げ捨てた行為が印象的に述べられる⁽²⁴⁾。その後で、クレオーニュモスの息子が登場して歌うエレゲイア詩が盾を置いて逃亡した内容の詩であり、これを トリュガイオスがクレオーニュモスと結びつけるというように、クレオーニュモスについての言及はこの劇の中で積み重ねられている。ラーマコスへの言及についても同様の積み重ねが見出される。すなわち、ラーマコスについての言及が 304 行⁽²⁵⁾ と 473-4 行⁽²⁶⁾ で二回なされた後、ラーマコスの息子が登場する。

クレオーニュモスについての言及の積み重ねの中で、1301 行での ψυχὴν δ' ἐξεσάωσα という表現は、675 行の ψυχὴν γ' ἄριστος という痛烈な皮肉を観客に思い起こさせるという喜劇的効果を持つものとみなすことができる。他方この効果に着目すると、アルキロコスのエレゲイア詩におけるもとの詩句と『平和』におけるその引用との関係についても新たな見方を得ることができる。すなわち、上述のようにアルキロコスのもとの詩句であったと推測される αὐτὸν δ' ἐξεσάωσα とは異なる ψυχὴν δ' ἐξεσάωσα が『平和』で引用された理由として、674-8 行でのクレオーニュモスへの言及との関連性を作り出す効果のために、αὐτὸν が 675 行で用いられた ψυχὴν に変更されたためとみなすことができる。この見方は、アルキロコスのもとの詩句が αὐτὸν δ' ἐξεσάωσα であったとして、『平和』において αὐτὸν が ψυχὴν に変更されたことについて、Dover や West よりもさらに積極的な理由づけを提供するものである。

主要参考文献

- A. W. H. Adkins, *Poetic Craft in the Early Greek Elegists*, Chicago, 1985.
 T. W. Allen, *Homeri Opera*, tom. v, Oxford, 1912.

(22) Olson, ad *Pax* 446.

(23) *Eq.* 1369-72; *Nu.* 353-4; *V.* 15-27, 592, 821-3; *Av.* 288-90, 1473-81.

(24) 盾を投げ捨てる行為については、他に『平和』1186行(ῥιψάσπιδες)にも言及がある。
 (25) ἡμέρα γὰρ ἐξέλαμψεν ἤδη μισολάμαχος. 引用中の最後の語は「ラーマコスを嫌う」という意味の造語。

(26) ラーマコスは、平和の女神を救い出すために綱を引く者たちの邪魔をして、トリュガイオスに叱責される。

- A. Bernabé, *Poetae Epici Graeci*, pars i, Leipzig, 1987.
- E. Buchholz/R. Peppmüller, *Anthologie aus den Lyrikern der Griechen*, Leipzig/Berlin, 1911.
- D. A. Campbell, *Greek Lyric Poetry*, New Edition, Bristol, 1982.
- M. Davies, *Epicorum Graecorum Fragmenta*, Göttingen, 1988.
- E. Diehl, *Anthologia Lyrica Graeca*, fasc. iii, ed. tertia, Leipzig, 1952.
- K. J. Dover, 'Archilochus' (rev. of F. Lasserre/A. Bonnard, *Archiloque: Les Fragments*), *C. R.* 10 (1960), pp. 10-12.
- D. E. Gerber, *Euterpe: An Anthology of Early Greek Lyric, Elegiac and Iambic Poetry*, Amsterdam, 1970.
- T. Hudson-Williams, *Early Greek Elegy*, Cardiff, 1926.
- F. Lasserre/A. Bonnard, *Archiloque, Fragment*, Paris, 1958.
- S. D. Olson, *Aristophanes: Peace*, Oxford, 1998.
- G. Perrotta/B. Gentili, *Polinnia: Poesia Greca Arcaica*, Firenze, 1965.
- I. Tarditi, *Archilochus*, Roma, 1968.
- M. Treu, *Archilochos*, Göttingen, 1959.
- M. L. West, *Iambi et Elegi Graeci*, ed. altera, Oxford, 1971.
- M. L. West, *Studies in Greek Elegy and Iambus*, Berlin, 1974.
- M. L. West, *Greek Epic Fragments*, Cambridge (Mass.), 2003.

本稿は平成 17・18・19 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「西洋古典文学における間テキスト解釈理論に基づく実証的作品論研究」(課題番号 17520186) による研究成果報告の一部である。

(国際基督教大学)